『無者キリスト』を読む （新宿集会にて）

第三相 「突破・突入」

――第二部　人間の福音的実存七相――

２０２３年６月25日
弘野慶次郎

破れ・砕け　深みへ漕ぎ出でよ！　霊肉渾然　イエスの深い祈り　突破・突入　徴　桑の木に
よじのぼる　信仰というのはまず一対一　エリコのザアカイ　イエスとザアカイの出会い　天
的必然性　信仰告白　伝道

●破れ・砕け

今日は『無者キリスト』（小池辰雄著作集第１巻）199頁の「突破・突入」から入っていきたいと思います。

その前に、「砕け」の話がちょっと出ました。なぜ、「砕け」のところの話をしたかというと、去年やっていて、それからコロナで中断しました。コロナで中断したあと、どこから始めたらいいかなと思ったところ、小池先生の特徴みたいのがこの「破れ」と「砕け」なんです。「罪」とかいうよりも先に、人間は破れている存在だということと、砕けなければどうにもならないということを中心に、小池辰雄の体験がこの言葉に表れていると思って、僕は「破れ・砕け」からまた再出発したというわけです。

小池辰雄の本当の信仰の体験は、自分が非常に砕かれたということから発している。その砕けから発しているのが、小池辰雄の神学というか、小池辰雄の信仰の質だと思う。僕はそこら辺から始めた方がいいのではないかと思って、そこを最初に持ってきて、「破れ・砕け」から始めたいという思いでやってきました。

今日は「突破・突入」から入りますけれども、やはりその中にこの「破れ」「砕け」とかいうようなことがその背後に連なっているように僕は思います。読むと、そういう感じがいたします。

●深みへ漕ぎ出でよ！

では、さっそくまた例によって読んでいただきます。

《第三相　突破・突入　「深みへ漕ぎ出でよ！」（ルカ５・１～11）

「預言者はおのが故里（ふるさと）、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざることなし」（マルコ６・４）

とイエス自ら故里ナザレのために嘆き、故里を立ち出で、ガリラヤ湖北岸のカペナウ

ムで、且つは福音を説き、且つは病を癒したり、悪鬼を逐い出したりして、霊肉渾然（こんぜん）たる伝道をしていた。

我々が見のがしてはならないことは、イエスがいかに、日が暮れてから、また朝まだきに、時には夜もすがら、深く祈ったかということである。イエスは祈りにおいて聖霊の力を深く宿したのである。み霊が身に満つることなしにイエスは福音を説かない、癒しをほどこさない。力ある言（ことば）、力あるわざはみな聖霊の力による。「わが言は霊なり、生命なり」とイエスが言ったのは正に彼がみ霊（たま）の人であったからである。

カペナウムの群衆がイエスをとどめおこうとしたとき、イエスは言った。

「私はまた他の町々にも神の国のことを福音せざるを得ない。私はこれがために遣（つか）わされたのだ。」（ルカ4・43、私訳）

そう言ってガリラヤ地方のシナゴーグ（ユダヤ教の会堂）で、または路傍で、野辺で、湖畔で伝道をした。》

これを読んでいきますと、よく分かります。最初の、

「預言者はおのが故里（ふるさと）、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざることなし」

という言葉をわざわざ引用しているのは、小池辰雄がやはり無教会から破門されたようなことがあったでしょ。だから、孤立した。小池辰雄が霊的に新しく生まれ変わったあと、無教会の勢力から追い出されたという、その思いがここに出ているのではないかと思う。そういう思いで、ここにキリストがこう述べられたものを最初に引用しておられるのではないかな、と僕は思った。確かに、故里では尊ばれない。

小池辰雄の故里というのは無教会ですけれども、無教会というのはカチンカチンです。僕も若いときに無教会の研究会にちょっと出たことがあるけれども、それは賢い人が姿勢を正して信仰そのものが優等生的な信仰なんです。それは信仰といえるかどうか分からないけれども、そういう所だとリラックスできない。僕はそういう経験がある。

小池先生はすごくリラックスしているでしょ。だから、奥田先生が小池先生に接してから、

「気が楽になった。解放された」

とかいうようなことを言っておられるのは、小池辰雄の大きな抱擁力みたいなものが信仰の中にあるということです。僕も小池辰雄に接したときに、僕は先生のことを

「小犬みたいだ」

と言ったことがある。そしたら、

「ポチ（小犬）になぞらえたらダメだよ」

とか言われたけれども。本当に幼児のような、小犬の目みたいな、そういう感じを受けた印象が僕にはあるので、本当に放たれた魂で信仰に入っておられたのだなということで、小池辰雄が分かりました。一番初めに会った時には、なにか恐い感じがしたけれども、接していると本当におおらかな大きな愛の中で生きておられるということがよくわかった。

そういう印象がありました。

●霊肉渾然

それから、ここにありますように、

「霊肉渾然（こんぜん）たる伝道をしていた」

と書いてある。この「霊肉渾然」というのはどういうものか。僕もこれを読でいる時に、スーとこれを読みとばしていた。「霊肉渾然」というのは一体どういうことかということを、わざわざ辞書で引いてみた。「渾然」というのはどう意味かというと、

「相いれないものが同居すること」

をいうので、ただ混じっているというだけではない。本当に相いれないものが同居しているのが「渾然」という意味なのだそうです。

「霊肉」というと、「霊」というのは神さまのことです。「肉」というのは人間でしょ。人間の体の中で、人間の存在の中で、神さまが敵対しないで同居しているというような状態が、イエスの状態なんです。それが「霊肉渾然たる」ということです。こういう言葉を小池辰雄は使いますけれども、「渾然」という言葉は全然、日常使いませんよね。現に僕は「渾然」とかいう言葉は使ったことがない。「渾」なんていう字は、教育漢字の中にはないのではないかな。教えてもらったことがないから、その意味が分からなかった。辞書にはちゃんとそういうことが書いてある。

我々人間にとっては、パウロの言っているように、神さまは敵なんですよね。敵だからこそあの十字架にかけて殺してしまったわけですよ、人間がね。だから、相いれないんです。神さまを受けいれる素地がないんですよ、我々には。

それがイエスにあっては、神さまを受けいれる充分な――十字架を抜きにしてですよ、十字架を抜きして――イエスの存在の中に神さまが充満しているということを言っているんです、「霊肉渾然」というのは。我々は、十字架で砕かれて初めて、この

「霊肉渾然たる存在」

に変えられている。小池辰雄は「霊肉渾然たる存在」に変えられている人でした。もちろん、人間だから欠点もありましたけれども、その欠点をぬきにして、そんなこととは関係なしに、小池の中に神さまが、イエスがもう入り込んでいたという感じがします。

小池辰雄の体験として、自分は十字架によって砕かれて霊肉渾然たる存在にされたから、こういう言葉が出てくる。イエスという方が霊肉渾然たる相いれないものが同居して存在しているということを強調したいために、こういう

「渾然たる伝道した」

という表現になっていると思う。他のところでは、この言葉を結局ちがう意味でちゃんと解釈しておられるけれども、ここでは「霊肉渾然たる」ということの解釈なんか何もして

おられないので、ついついこれを読みとばしてしまう。イエスの体の中には、存在の中には本当に神さまが充満しているということを言いいたいんです。だから、このあとで、

「**わが言は霊なり、生命なり**」

というような言葉を引用しておられます。その他にも、

「**我を見た者は父を見たのだ**」

とか、

「**我と父とは一つなり**」

とかいう言葉があります。これはヨハネ伝に立て続けに出てくる。ヨハネ伝の3章、6章、10章、14章に、

「**わが言は霊なり生命なり。私を見た者は父を見たものである。私と父とは一つである**」

これが全部、「霊肉渾然たる存在」ということの意味ですよ。小池辰雄は日本人ですから、こういう言葉を使う。パウロなんかは、そういうような言葉の使い方はできない。日本人とはちがうから。だけど、小池辰雄は日本人ですから、こういう簡単な言葉でイエスの在り方を如実に表している。

「**わが言は霊なり生命なり。私を見た者は父を見たものである。私と父とは一つである**」

こういう表現が、この「霊肉渾然」ということの意味だと思う。

●イエスの深い祈り

それから、我々が見逃してはならないのは、イエスが深い祈りをされたということです。

「夜もすがら深く祈った」

ということを書いておられます。僕はあまり祈るような人間ではない。だから、「祈り」というのが分からないけれども。

僕は、祈らなくてもいいと思うようになったのは、イエスの中に僕は取り入れられているから。

「イエスにハグされている存在だ」

と、僕はいつも感じるんです。朝起きた時から、ものすごく思う。人には言いませんけれども、嬉しさがこみ上げてくるんですよ、朝起きた時から。それは、子どもが母親に抱かれているような存在で、

「僕はイエスに抱かれている、イエスが私の中に生きている」

というような思いがいつもある。だから、僕自身は祈らなくても済むんです。子どもは祈りませんよ。祈らなくても、母の懐の中で安らぎます。そういうふうなことなんです。

「イエスは夜もすがら祈られた、深く祈られた」

とかいうことを小池は書いてますけれども、これは僕はイエスの気持ちまでは分かりませんけれども、すごくこう祈られた時は喜びの中におられたのではないかと思う。イエス・キリストが、義務で祈っているとかということではなくて、祈らないではおられないような状態で、喜びの中で神さまの中の懐で深く祈っている。これは「祈る」というよりも、

「深い父の懐の中で存在していた」

と、僕は思う。

「祈る」ということになると、何か対象があってそれに向かって祈るというような印象を僕らは受けますけれども、実は、自分の中にキリストが居られる時に、祈りというものはキリストそのものが祈りだと思う。だから、

「深く祈られた。夜もすがら祈られた」

とかいうのは、父の懐の中で喜びの中にひたっておられたのではないかな、と僕は思います。小池辰雄は、十字架で砕かたれたあと祈られますけれども、やはりイエスに抱かれて、イエスが自分の中に入ってこられて、それでものすごい、

「大歓喜の中に」

とかいう言葉を使っておられます。

「深山の霊気よりもすがすがしい気持ちになった」

とか、言っておられますけれども、そういうふうな状態が祈れるのではないかなと僕は思っています。わざわざ、「神さま！」と言って祈ると、祈るということがなにか対象になって、遠い存在なんです。

ところが、イエスとか小池辰雄は、自分の中に神さまがおられるから、それに対して語りかけているというか、祈りそのものが体の中に入っているというか、そういう感じがしますね。だから、

「イエスがいかに、日が暮れてから、また朝まだきに、時には夜もすがら、深く祈ったか」

という言葉がありますけれども、これは父の懐の中でずうっと、祈るというより、

「父の懐の中で憩われていた」

というような感じではないかなと思う。

祈りというのは、人と接する時というのは、人がワイワイいうから、なかなかその一つの中に入れないけれども、孤独の状態になったら、父の懐の中で充分憩うことができる、そういう時間が非常に大切だから、我々が見逃してならないのは、そういう祈りの時だというようなことですね。

「祈り」という言葉で言ってしまうと、これは何か限定されてしまうけれども、

「父の懐の中で憩っていた」

というのが、僕は祈りではないかなと思う。小池辰雄も、瞑目して手を合わせていると、

「（体が霊動して）跳び上がったりする」

とか仰っていますけれども、あれは言葉として祈っておられるのではないと思う。イエスの中に憩っておられるという状態が、小池の祈りだったのではないかなと思う。それのもっと深いのがイエスだった。

我々は本当に十字架によって砕かれて初めて、霊肉渾然というのが分かるんですけれども、キリストだけは十字架なしに霊肉渾然でしょ。だから、もの凄い例外的な人だった。そういう人が深い祈りをされる。深い祈りの中で父と一つになるというその時を、非常に充実した時、喜びの時を持っておられたのではないかなと僕は想像する。

「み霊が身に満つることなしにイエスは福音を説かない、癒しをほどこさない。力ある言、力あるわざはみな聖霊の力による。」

と、そういう深い深い父と一つになった状態を経験されたあとで、御霊が満ちてきて、言葉になり行為になっているということをここで小池辰雄は言っている。それから、

「カペナウムの群衆がイエスをとどめおこうとしたとき、イエスは言った。

「私はまた他の町々にも神の国のことを福音せざるを得ない。私はこれがために遣わされたのだ。」（ルカ4・43、私訳）」

と。「福音せざるを得ない、必然だ」ということを小池辰雄は言っている。共同訳では、「せざるを得ない」ではなくて、「しなければならない」となっています。それを

「神の国のことを福音せざるを得ない」

というふうに、小池は訳し換えていますけれども、もうのっぴきならないで、「こうしないではおられない」という状態を言っています。

「せざるを得ないというのが本当の世界ですよ」

と、小池辰雄は言ってます。

「ガリラヤ地方のシナゴーグ（ユダヤ教の会堂）で、または路傍で、野辺で、湖畔で伝道をした」

と、いろんな所で伝道したと書いてます。福音書を読んでいると、突然のことが起こりますよね。長血を患っていた女性が衣に触って癒されたという、あんなのは突発的な出来事です。けれども、その時に本当に野辺で、ちがった意味であれは福音しておられる、福音を語っておられるというようなことがあるので、ちゃんとしたシナゴーグだけではなくて、臨機応変に伝道しておられるというようなことをここで小池辰雄は言いたかったのではないかなと思います。

●突破・突入

《またあるとき、それはガリラヤ（ゲネサレ）湖畔であったが、群衆が磁石にひきつけられる鉄くずのようにイエスのまわりに蝟集（いしゅう）して神の言を聴いていた。群衆の波で

イエスは汀に押し出されそうである。すると渚に二艘の舟が寄せてあるのを彼は見た。漁人たちは舟から出て来て網を洗っていた。イエスはその一艘であるシモン・ペテロの舟に乗り、ペテロに少しく舟を押し出してくれと頼んだ。イエスは舟板に腰を卸して舟の中から群衆に道を説いた。語り終るとペテロに言った。

「深みへ漕ぎ出でよ！　網をおろして漁れよ！」（ルカ５・４、私訳）

と。突如たるイエスの勧めに驚きながら、ペテロは答えて言った、

「先生（エピスタータ）、夜通しやってみたんですけど、空らっきし駄目でした。だけれど、お言葉通りに網をおろしましょう！」（ルカ５・５、私訳）

ペテロは漁りにかけては多年の経験を積んだ玄人漁夫である。漁りのことにかけてはイエスといえどもかなわないはずである。昨夜の時化から判断して、今日漁獲があるとは考えられないから、網を洗って、しばらく様子を見ようとしていたのだろう。

しかしペテロが、素人なるイエスの言葉を卒直に受けとめ、「だけれど」といって、自分の玄人判断をも突破して、直ちに順ったところに、信仰の大切な気合があった。しかもそれは「深みへ漕ぎ出でよ！」である。

信仰とは、自分の過去の経験、一般の常識、状勢の判断をも、ある時点においては、換言すれば、神意の動く時点においては、突破し、深みへと大胆に突入することである。そのためには、欲心、私心を脱する祈り心が大切である。

イエスの言を信受し、直ちに信従し、深みへの行動に出た。これが自己突破、神意突入である。果然、大漁で網も裂けんばかりであったので、他の一艘をも差し招いて援助を求めた。魚は二艘の舟に満載され、しかも舟が沈まんばかりの大漁であった。

シモン・ペテロはこのありさまに驚嘆して、イエスの膝下に平伏して言った。

「どうぞ私から離れてください。私は罪ある者です、主様！」（私訳）》

ここを読んで、すごく分かりやすいですね。「だけれど」という所に点を打ってあります。確かに我々が神さまから離れることってありますよね。あるけれどもその時に、何かあった時に、

「しかし、あなたのお言葉ですから」

という、そのことは非常に重要です。ペテロは率直な性格だったので、まぁ内心は思ったでしょうね。ここに書いてあるように、昨夜から時化だったから漁獲なんかありえないというようなことは常識的にもわかっているから、

「今日はもうこれで仕事は終えておこう」

というようなことをきっと思ったと想うんですけれども、

「しかし、あなたの仰ることだから」

と言った。この「けれども」というのは非常に大切なことです。こういう事象を見ても、

「これは単なる宗教的な何か作り話だ」

と言っている人の方がやはり大部分だと思う。聖書を読んでいて、

「こんなことはありえない」

と思っている人が僕の周りにもいっぱいいます。だけれど、この「けれども」が、

「こういうものを見たけれども、やっぱり信じられない」

という人と、

「けれども、あなたが仰ることだから」

という「けれども」の二つあると思う。ペテロが素人であるイエスに率直に従ったという、その「けれども」が非常に重要だというようなことをここで言っている。

「信仰とは、自分の過去の経験、一般の常識、状勢の判断をも、ある時点においては、換言すれば、神意の動く時点においては、突破し、深みへと大胆に突入することである。」

流されていくと、何か常識が勝ってしまうんですね、我々は。日常生活では、常識がのしかかってしまいますが、

「けれども、あなたが仰ることだから」

ということで、全面信頼しているというペテロの率直な態度をここで読みとれます。これは我々の日常生活では、信仰の生活においては非常に重要なことです。常識を、ある時点では否定して、

「あなたの仰る通りです」

というふうな、それが信仰の在り方の一つですね。

「信仰とは、自分の過去の経験、常識、そういう判断をも突破していく」

というようなことをここで小池辰雄は言ってくれている。

「イエスの言を信受し、直ちに信従し、深みへの行動に出た」

と。ここで、

「深みへ漕ぎ出よ」

というふうに小池辰雄は言ってますけれども、「沖へ出よ」と書いてあるだけです。ここを小池は「深みへ漕ぎ出よ」と言っています。「深み」というのはやはり何かちょっと危険な所で、そういう危険な所へ漕ぎ出よと言ったわけです。

●徴

《素人が玄人に勝った。ペテロは勿論、この素人がただの素人でないことはわかっていた。イエスがケタちがいな霊の人であることをつらつら見て知っていた。ではあるが、あまりの大漁に全く驚嘆したのである。そしてこの大漁をただよろこんだのではない。大漁という現象、徴を見てこの徴を起こしたその人に対して驚異と畏敬の念に打たれ、平伏したのである。ゼベタイの子でシモンの友であるヤコブもヨハネも同じく驚嘆した。ルカはしかし大漁に驚いた、とのみ記して、この徴を起こしたこの霊人に驚いた

とは記していないが、筆の奥は、大漁ではなく、大漁を起こした霊人を指すと見るべきであろう。

おのれを罪ある男と自認し、平伏したペテロの態度はいかにもペテロらしい。

イエスはペテロの正直な心根を受けとめて、

「**懼れるな、おまえは今から人を漁ることになるぞ**」（**私訳**）

大漁という徴は、ペテロを、そして他の弟子たちをも、時が来たら、人を漁る伝道者にするぞという将来を見通しているイエスの預言的な徴であったのである。

「だけれど」といって自己を主張して神意を拒む者は亡びてゆく。「だけれど」といって自己を否定し、つねに新たに自己を突破して、神意に即く者は栄光の道を往く。

このときペテロを始め、ヤコブもヨハネも、

「**一切を棄ててイエスに従いて往った**」（**ルカ5・11**）

「一切を棄てて」、この語の奥義は、自己を棄てて、ということである。自己を棄てては、おのれをキリストの中に投げ入れてということである。それが本当の現実となるには、まだ時間を要した。というのは、聖霊の降臨を俟って始めて、これが本当の現実となったからである。》

ここで重要なことは、「徴」ということです。

「この大漁をただよろこんだのではない」

と書いてます。これはペテロが平伏したでしょ。

「どうぞ、私から離れてください。私は罪ある者です、主さま」

と。こう言って、平伏したところにペテロが単なる喜んだだけではないということが分かります。これは一つの徴でありますけれども、ここに小池が書いてあるように、

「この徴を起こしたその人に対して驚異と畏敬の念に打たれ、平伏したのである」

と書いてますから、徴を起こした人のその奥を見ないといけないということです。

「筆の奥は、大漁ではなく、大漁を起こした霊人を指すと見るべきであろう」

と、小池辰雄は書いてくれています。

このペテロ、ヤコブ、ヨハネに対してこういうことをされたけれども、目の見えない人の目が見えたとか、いろんな徴がたくさん出てきます。ところが、その徴だけを喜んでいると、本当の奥の愛だとか生命だとかいうことまでは到達しない。だから、

「ハンセン氏病に罹った人が十人癒されたけれども、帰ってきたのはたった一人だった」

というような記事もありますけれども、あれはイエスが非常に嘆かれているのは、

「そこで満足してしまっていたのではダメですよ」

ということを言いたいんです。本当はその神さまの奥の奥ですね。

「生命の愛が、あなたにとって復活そのものが生命なのに、そこで留まってしまっ

たら、もうそこで信仰も人生も、神さまとの関係も絶たれてしまう」
というようなことです。だから、
「徴を見たその奥に何があるか」
というようなことを、ここで小池辰雄は言いたいんだと思う。
「ルカはしかし大漁に驚いた、とのみ記して、この徴を起こしたこの霊人（ひと）に驚いたとは記していないが、筆の奥は、大漁ではなく、大漁を起こした霊人を指すと見るべきであろう。」
というふうに、
「その徴の奥をやはり見ないといけない」
ということを書いてある。とんでもないことですよ、あの
「死人が甦った」
とか、
「目が見えないのに突然目が見えた」
とか、
「時化で魚が採れないのに大漁の魚が採れた」
とか、これはとんでもないことをなされた。嵐の時には、
「嵐よ、静まれ！」
と言ったら、嵐が静まったでしょ。それに接していながら、なかなか弟子たちもイエスが本当の神の子であるということを知ることができなかった。ペンテコステでもって初めて、イエスがキリストである、救い主であるということが分かったんです。このペテロだけではなくて、なかには
「あなたこそ活ける神の子です」
とか、そう言っている人がいますでしょ。その人はその徴を見たり何かしただけで、この人が本当に神人である、霊人であるということを見ぬいて、神の子であるということを見ぬいている人が例外的にあった。だけど、弟子たちはそこまでまだ行ってない。「平伏した」とは言ってますけれども、それ以上のことはまだペンテコステがくるまでは分からなかったと、どこかに書いてました。
ここで、「けれども」ということをもう一度書いてます。
「「だけれど」といって自己を主張して神意を拒む者は亡びてゆく。「だけれど」といって自己を否定し、つねに新たに自己を突破して、神意に即（つ）く者は栄光の道を往く。」
と。この二、三行のところは小池がもう一度ここでまとめてくれている。大事なことは、
「自己を棄ててとは、おのれをキリストの中に投げ入れてということである」
ということを書いてます。これも重要なことです。本当に自己を棄てて、「自己を棄てる」といったら、何かものすごく重要なことと思うけれども、

「キリストの中に抱かれる」ということになると、それはものすごく安心で、ものすごく楽な生き方ということになります。そして、

「それが本当の現実となるには、まだ時間を要した。というのは、聖霊の降臨を俟って始めて、これが本当の現実となったからである。」

弟子たちはこの時も平伏したりしてるけれども、本当に神の子であるというようなことを、まだこの時期では分からなかったということです。

「聖霊降臨があって初めてキリストの中へ自分を投げ入れるということができる」ということになります。ですから、

「十字架を受けとるということが非常に重要である」

ということもここに暗に言っていると思います。ここを読んでいると、当たり前のことをすごく分かりやすく、小池辰雄は書いてくれている。

●桑の木によじのぼる

その次に、「桑の木によじのぼる」という所に入っていきたいと思います。

《「桑の木によじのぼる」（ルカ19・1～10）。

「1さてイエスはエリコに入ってその町を通って往った。2するとそこにその名をザアカイという男がいて、彼は取税頭（かしら）で、金持であった。3彼はイエスがどんな人であるかを見たいとあがいていたが、なにさま背丈が低いので群衆のためそれがかなわなかった。4彼はイエスを見ようと前方に走り出て桑の木（スコモレア）によじのぼった。5イエスはその場所に来たので見あげて彼に言った。「ザアカイよ、急いで降りてきなさい。今日、私はあなたの家にきっと泊まるからね。」6そこで彼は急いで降りてきて喜んでイエスを迎え入れた。7するとみんなはこれを見て呟（つぶや）きあって言うには、「イエスは罪びとのところに泊まり客となって入っていった。」8ザアカイは立ったまま主に言った、「主様、誓って私の財産の半分を貧しい人たちに施します。またもし誰かから不正な搾取をやっていましたなら、四倍にして返します。」9イエスは彼に言った、「今日、救がこの家に来た。彼もまたアブラハムの子なのだから。10人の子が来たのは、失われた者をさがし出して救うためなのだから。」（私訳）》

このザアカイの話は、皆さんもよく御存知の話です。

「今日、私はあなたの家にきっと泊まるからね。6そこで彼は急いで降りてきて喜んでイエスを迎え入れた。」

この「喜んで迎え入れた」ということは、別にザアカイが病を治してもらったとか、そういうことではない。ただイエスに声をかけられただけで、喜んでいる。我々はイエスに

出会っただけでもう、本当の喜びに入るべきだと思うんです。

「大いに喜んで」“with great joy”と英語で書いてます。

「大いに喜んでイエスを迎え入れた」

と。だから、この記事を書いた人は、ザアカイがものすごく喜んでいる姿を間近に見ているんだと思う。他の人は呟いたりしているけれども、この記事を書いた人は、ザアカイがもの凄く喜んでいるのではないかなと印象づけられたのだと思う。別に病を治してもらったわけでも何でもない。それをイエスから、

「私はお前の家に泊まるよ。下りてきなさい」

と、語りかけられただけで、ザアカイという人はもの凄く喜んで迎え入れた。

「彼は取税頭で、金持であった。3**彼はイエスがどんな人であるかを見たいと**
あがいていたが」

「あがいていた」かどうかは分かりませんけれども、とにかく、見たい一心ではあったでしょう。好奇心だったかもしれないし、何かは分かりませんけれども、とにかく、「見たい、見たい」という思いが非常にあったんでしょうね。

それにはザアカイのやはり置かれた立場ですね、人から悪口言われたり、いろんなことをしているでしょ。だから、やっぱり気持ちの上では孤独だったのではないかなと僕は思う。何とか、噂で聞いているイエスに会えたら、それだけで嬉しいだろうと思った。けれども、背が低いということがあったので、桑の木に上って待ち構えていたというわけです。そして、イエスがその場所に来た時に、

「ザアカイよ、急いで降りてきなさい。今日、私はあなたの家にきっと泊まる
からね。6**そこで彼は急いで降りてきて喜んでイエスを迎え入れた。」**

という。そしたら、ザアカイは喜んで、

「主様、誓って私の財産の半分を貧しい人たちに施します。またもし誰かから
不正な搾取をやっていましたなら、四倍にして返します。」

こういう約束をするわけです。もの凄く喜んだから、パッとこういうふうなことを言ってしまった。わざわざそんなことは言おうと思ってなかったと想うんですよ。イエスに会って、もの凄く喜んだから、思わずこんなことを言ったのだろうと僕は思う。そうすると、イエスがまたそれに対して、

「今日、救がこの家に来た。彼もまたアブラハムの子なのだから。10**人の子が**
来たのは、失われた者をさがし出して救うためなのだから。」

「救いがこの家に来た」と言う。「この家」というのは複数ですよ、「家に」ではなくて、

「家に住んでいる人々に救いが来た」

という意味です。ザアカイがもの凄く喜んでいたら、その波及が家族全員あるいはその雇人全員に波及していくと思う。だから、

「救いがこの家に来たんだ」

というようにイエスが言うわけです。一人がザアカイのようにもの凄く喜んでいたら、その家全体が喜びに満ちますよ。皆が喜んでいたら、こんな楽しいことってないじゃないですか。もうそういう雰囲気がここにはあると思う。大いに喜んで、

「搾取していたら、搾取もやりません、四倍にして返します」

と言ってしまった。もの凄く喜んだら、そういうことがおのずと口から出てきますよね。そうしたら、

「この家には救いが来たんだ」

と、イエスが仰ったわけです。一人の人が信仰者となって、もの凄く喜んでいけば、その家庭、その家はもの凄く明るくなりますよ、それだけでもね。そういうふうなことをイエスも言われたのではないかと思います。

「失われたものを探しだして救うためである」

というふうなことをイエスが言われたけれども、「ロストコイン」（失われた銀貨）とか「ロストシープ」（失われた羊）とか「ロストサン」（失われた息子）の所でお話しましたように、全部これは失われたものを神さまが探しているというようなことです。本当に失われたものを捜すために、イエスは来られたのだと思います。

●信仰というのはまず一対一

だから、イエスという存在は、ザアカイにとっては恐い人でも何でもなくて、もの凄い愛情に溢れた人と見えたんでしょうね。見える人には、もの凄い愛情の深い人と見えたのだと思いますよ。だから、ザアカイは一目見ただけで、声をかけられただけで、

「あっ、この人だったらもう信頼していいんだ」

というふうなことを感じとって、もの凄く喜んだと思う。僕らもそういうふうになりたいなと思いますよね。ザアカイは先回りして、桑の木によじ登って、

「どんなやつだろうか？」

と見ようと思って、そこまではザアカイがやった。ところが、声をかけて来た方はイエスの方でした。見たいという一心と、それから声をかけたイエスとの間に、一対一の火花が飛んだといったら、ちょっと表現がまずいかもしれないけれども、そういうザアカイの思いをイエスは受けとって、イエスの方から声をかけられたというふうに思います。

イエスと我々との関係というのは全部、そういう関係だと思う。自分の側がイエスに会いたいなと思ったその思いをイエスはちゃんと受けとられた。だから、イエスの方から声をかけられたということです。

信仰というのはやっぱり、まず一対一なんです。

「キリストと我々が一対一であって、それが横へ広がっていく」

と、小池が言ってますように、まず一対一なんです。この一対一というのがここでよく分かりますね。ザアカイという人はもの凄く喜んだと思う。本当に喜んで、そういう思いでイエスに接したのだろうと思う。そうすると、

「この家に救いがきた」

というふうに、直ちにイエスが仰った。これはもう瞬間的な話ですよ。そんなに時間はたってませんよ。この会話をしただけで、イエスとザアカイとの間に救いがもたらされたという。これが小池が言う、

「信仰とは……、ある時点においては、換言すれば、神意の動く時点においては、突破・突入することである」

「瞬間をつかえまろ」

と、小池辰雄はよく言いますよね。もの凄く短い時間ですけれども、この瞬間をザアカイはつかんだというようなことが言えるのではないかと思います。

●エリコのザアカイ

《エリコのザアカイ。このザアカイの物語は、ルカ福音書特有の記事で他に並行記事はない。

イエスがエルサレムに上る途次においてエリコ「棕梠の町」（申命記34・3参照）を通り過ぎようとした。エリコという町は、当時ローマの一州であるところのユダヤの東辺の相当重要な町で、今でいうと税関みたいなものがあり、そこの税関の取税人の長（おさ）のザアカイという名前は、旧約から来ていて、「純潔」「潔白」という意で、税吏は当時ローマの官憲の手先となっていたので、ユダヤ人には非常に嫌われ、そして、自分の懐を肥やしているいわゆる「取税人」で、「富者」と特に書いてあるわけである。イエスの如何なる人であるかを見ようと思ったけれども、背丈が低くて群衆のために見ることができない。イエスのことは既に、うわさで充分聞いているので、「どんな人だろう」、とにかく、一代の預言者イエスを見ようと思ったわけである。

ところが、このザアカイという人は、普通の取税人とは、ちょっと人物がやはりどこか違っていたと思われる。取税人の長であるならば、もう少しその振舞も、勿体ぶるわけだけれども、それとは反対に、「前方に走り出て、桑の木によじのぼる」といういかにも卒直な人柄だった。》

ここを読んだらすごく分かりますよね。もの凄く率直な人だった。子どもみたいな人ですね、ザアカイというのは。桑の木にスルスルとのぼって、上の方から覗いた、

「どんな人かな?」

と思って。こういう率直な人柄というのは、非常に子どものような魂の在り方というのが重要なんですね。それから、ここは「ザアカイ」という意味は、「純潔」とか「潔白」とい

う意味と書いてあります。これは知りませんでしたけれども、日本語でいえば「潔(きよし)さん」とか、そういうことでしょうね。ザアカイにしてみても、気持ちの上では非常に満たされないものがあったんでしょう。だから、イエスという人にもの凄く期待していたのだろうと思います。

●イエスとザアカイの出会い

《イエスとザアカイの出会い。当然、キリストがエルサレムに上る時には、勿論、ガリラヤの方から、いわゆる「原始使徒」たち、ほかに弟子たち、沢山の女たちが随行して来たし、過越の祭の時であるから、沿道に多くの群衆がうごめき、半分物見高に集まって来てイエスを迎えたわけだろう。ところがイエスがなかなか見えない。それでザアカイは前方に走り出て桑の木によじのぼった。いわゆる昔の大名行列だったら、上からなんか見ようものなら大変なことであるが、このザアカイはこの預言者を迎えるのに、「桑の木によじのぼる」というような人の意想外の行動に出たわけである。この桑の木というのは預言者アモスが栽培していたものと同じで「いちじく桑」という植物で、かなり大きくなるたちのものであった。日本のいちじくに似てもっと太くなるものの由（松村義敏著『聖書の植物』五〇頁参照）。

「イエスはその場所に来たので見あげて彼に言った」

とあるように、イエスの方が逆に、ザアカイを仰ぎ見た。樹の上によじのぼった奇人がいたので。

「ザアカイよ、急いでおりてきなさい。今日、あなたの家にきっと泊まるからね。」

さあ、どうしてこのイエスはザアカイという名前をご存知であるか。あるいは、ザアカイという人物のことを聞いておられたのかも知れない。けれども、この木の上の人がザアカイであるということを、どうして知ったか。まわりの人たちが「あ！　ザアカイだ」といってさわいだかも知れない。とにかく、イエスはいきなり名を呼んで、

「急いで降りてきなさい。今日、私はあなたの家にきっと泊まるからね」

と。ザアカイは急いで降りて、喜んでイエスを迎える。ところが、人々がみなこれを見て呟いていうのに、

「イエスは罪びとのもとに泊まり客となって入っていった。」

一般の判断からいうと、取税人の長などというのは、罪びとという部類の中に入る私腹を肥やしている連中で、このザアカイもその一人である。そんなけがらわしい人の家に入って客となるとは、とあやしんだわけである。

イエスの言の中で「きっと」と私が訳した言は、ギリシア語では「デイ」という語で、「ざるを得ない」という強い言である。イエスという人の言行はすべてこの「ざるを得ぬ」天的必然性、霊法に即したものであることに深く注意しなければならない。

さてザアカイの「前方に走り出て桑の樹によじのぼる」という行動は、身分も、体裁も、他人のおもわくも考えず、イエスという人物を見たさの一念、一切の他念を捨ててしまった一念の故であった。》

繰り返し繰り返し書いてあるので、ずっとこれを読んでいくと、非常によく分かりますね。桑の木というのは――ここに書いてあります――10メートルから13メートル位になるような木らしい。大きな木だそうです。

ザアカイがもの凄く喜んだというのはこの記事に書いてあるけれども、「罪びとの家に入る」ということは、その当時としてはとんでもないことだったろうと思います。何か白い目でザアカイは見られていて、そういう所にイエスが入って行くというのは、その当時の宗教的な指導者たちからしたら、とんでもないことです。「罪びと」というレッテルを貼られているわけです。罪びととか遊女とか、ああいう人たちはレッテルを貼られておって、そういう人と一緒に居るということだけでも、とんでもないことなんですね。神の律法を破っているというふうなことで、非常にそういう目でイエスを見ていた。

●天的必然性

それから、

「イエスの言の中で「きっと」と私が訳した言は、ギリシア語では「デイ」という語で、「ざるを得ない」という強い言である。イエスという人の言行はすべてこの「ざるを得ぬ」天的必然性、霊法に即したものであることに深く注意しなければならない。」

「きっと泊まるよ」とかいうことを、「ざるを得ない」という言葉で言った。「あなたの家に泊まりますよ」ということを、

「「ざるを得ぬ」天的必然性」

ということを書いているでしょ。

「天的必然性であなたの家に泊まるんだ」

というふうなことを言っているわけです。「天的必然性」というのは、これも小池辰雄の言葉です。

「この「ざるを得ぬ」天的必然性、霊法に即したものである」

という。

「イエスがザアカイの家に泊まるということ自体が天的必然性である」

と、こう書いているわけです、小池辰雄は。

「天の必然性ですよ」

と。考えてみると、僕らがこの世に生を受けたこと自体が天的必然性なんですよ。僕は思うんです。こうして生きているでしょ。自分がこの世に生を受けたということはもの凄い天的必然性なんですよ。そう思いませんか？　凄いことなんですよ、自分が生きていると

いうことは。精子というのはもの凄く数が多いでしょ。あの中で一つだけ選ばれて卵子と一緒になるでしょ。自分の親、それのまた先祖と、ずっとたどっていって、自分が生まれるということは偶然だと思ったらダメなんですよ。絶対、偶然ではない。これは天的必然性で僕らはいるんです。

「天的必然性であなたがここに生まれているんですよ」

ということを僕はこれを読んでいて思いました。イエスがザアカイの家に泊まることが天的必然性と書いてあるでしょ。これは、

「そうせざるを得ないような状態ですよ」

ということです。そうしたら、僕らが生きていることはもの凄く天的必然性なんです。そして、こうしてイエスと出会っているではないですか、我々一人ひとりが。それも天的必然性なんです。神さまが必然として用意されているんですよ。

「誰(た)がために世にくだりて」

と讃美歌（138番「ああ主は誰がため」）で歌いましたけれども、「誰のために」というと、自分のためです。それは結局それも全部、天的必然性なんですよ。神さまが用意されて、我々はここに居るんです。神さまが用意されたから、イエスの所に来たんですよ。これは全部、天的必然性です。自分ではどうしようもないんです、これは。

何のために神さまがイエスをよこされたか。これは分かりませんよ。これも天的必然性なんです。

「もう愛して愛して愛しぬかないではおられない」

という、神さまの願いが我々にきているんです。それを我々はボーッとして生きているから、この天的必然性なんて全然感じない。けれども、考えてみたら、生まれ出てここに生きていることが天的必然性だから、もうこれほど有り難いことはないんです。

だから、「自殺は罪だ」とか言いますけれども、もうそんな「罪」だとかいうよりも先に、これは天的必然性であなたが必要とされてこの世に生まれたんです。これは訳がわかりませんよ、

「何で僕は生きているか？」

「何であなたは生きているか？」

「何でキリストの所へ僕らは来たか？」

とか、そんなのは全然分かりませんよ。これは全部、神さまの方の天的必然性によって我々は神さまのところへ来ているんです。こんなのは、

「自分で信仰した」

とかいうのは、とんでもないことです。自分は自分の意志で生まれたのではないでしょ。もう気付いたら、生まれていたんですよ。気付いたら生まれていたということは、これは全部、天的必然性なんです。

小池辰雄は、こういうとき「天的必然性」と簡単に書いてます。

「ザアカイの所に泊まるということが天的必然性、天的な必然性だった」

と、ここで小池は言っているわけです。すべてがそうなんですよ。だから、神さまの喜びの中に生きるということがもの凄く大切なことなんです。神さまがその天的必然性で我々をこの世に送られて、天的必然性で神さまの所に呼ばれたんです。だから、そういうことを考えると、この「きっとお前の家に泊まるからね」というのが、

「「きっと」と私が訳した言は、ギリシア語では「デイ」という語で、「ざるを得ない」という強い言である」

と、書いてくれています。

「イエスという人の言行はすべてこの「ざるを得ぬ」天的必然性、霊法に即したものであることに深く注意しなければならない。」

と、ここで一言、ほんの一行書いてますけれども、

「天的必然性、霊法に即したものであることに深く注意しなければならない」

と、本当にそうなんです。深く深く注意しなければならないんですよ。

「我々は偶然で生まれた」

と、僕は思っていたんです、僕は医者だからね。そう思ってました。だけれども、そうじゃないです。偶然なんて在り得ない。これは全部、天的必然性で我々は動いている。

ところが、人間は神さまの敵でしょ、神さまを信じようなんてしないわけですから。もう本当に神さまのところへ行く子どもはほんまに一握り、一粒なんですよ。キリスト者が日本では何％ですか、１％とか２％とか言いますけれども。その中でも本当に――それだけでも凄いことだと僕は思うけれども――本当に神さまのところに来るということは、もの凄い必然性で、もの凄く呼ばれているんです。もの凄く引きつけるようにされている。それがイエスの十字架なんですね。

初めに「霊肉渾然」という言葉を言いましたけれども、我々は十字架で砕かれなかったら、十字架の贖いを終えなかったら、霊肉渾然なんて在り得ないんですよ、我々にとっては。キリストにとっては、霊肉渾然というのは当然です、神の子として霊肉渾然ですけれども。我々は霊肉渾然なんて――言葉でいうのはやさしいけれども――これは本当に十字架で砕かれなかったら、霊肉渾然にならない。これは全部、天的必然性なんです、それも。なかなか十字架というのを受けとることができないのが人間の性（さが）なんです。どうしようもないんです。どうしようもないのだけれども、そのために十字架にイエスはかかられた。

「神の子にしよう、光の子にしよう、本当に永遠の生命をやろう」

という思いが凄くあって、これが霊的必然性として我々に来ているということになる。

小池辰雄は簡単にいろなことを書いてますけれども、おそらく僕以上にそんなことを深く知っていたと思う。小池の信仰の深みというのは、僕はここから学ぶことが多いのは、

やはりもの凄く深く小池辰雄は十字架を深く受けとったからだと思います。それを簡単な日本語で、そういうようなことを書いてますけれども。パウロなんかもそこまで言っていると思うんですよ。それは言葉として日本人ではないから、そういう簡単な言葉では言ってませんけれども。日本人だから、こういうことを簡単な言葉で、

「天的必然性」

とかいうような言葉で、一言で言ってくれていますけれども、これは凄い言葉なんですよ。天的に必然性でしょ。これは必然性で生きているということです。自分で生きているのではない。これは本当に神さまの願いで生きているんです、我々は。それを天的必然性と言っている。天的必然性というのは凄い言葉なんですよ、言ってみたら。

「天の思いの必然性が我々にある、我々に語りかけている」

ということでしょ。こういうような「天的必然性」というのを読みとばしてしまうと、何にもならない。ところが、これはもの凄い深い言葉ですよ。「神さまの必然性」でしょ。

「神さまの必然性が我々に語りかけている」

ということですから、とんでもないことなんです。

ザアカイという存在で、もう一度ここで小池は、

「ザアカイの「前方に走り出て桑の樹によじのぼる」という行動は、身分も、体裁も、他人のおもわくも考えず、イエスという人物を見たさの一念、一切の他念を捨ててしまった一念の故であった。」

と書いてある。

「他人の目を気にしたらダメです」

という意味ですよ、ここでこう言っているのは。一対一なんです。イエスと自分という一対一。もう他は何も見えてないんです、ザアカイにとっては。

そういう心意気をキリストはちゃんと見ぬいて、キリストの方から声をかけられた。キリストは人を見る目があるんですよね。人の魂の在り方を見る目はもの凄い鋭いんだろうと思います――「鋭い」という言い方をすると、なにかいやらしいですけれども――もの凄い深い眼差しがあるんです。だから、ザアカイという人がどんな思いで自分を待っているかというようなことを、すごく直感された。そういう他人の目を気にしないザアカイの態度をもの凄くよしとされたのではないかなと思います。小池辰雄のこういうのを読んでいると、

「小池辰雄はもの凄く深くキリストを受け入れたんだなぁ」

ということがよく分かりますね。

●信仰告白

《桑の木によじのぼる。集会でも、教室でも、前方に出て来ないで、うしろの方に席

をとるのは、心の態勢がわるいように、この福音というものは、「前方に走り出て、桑の木によじのぼる」という態勢でぶつかって来なければ駄目なのである。信仰とはこのような全身の投入、突破、突入である。ザアカイのこの行動が彼の信仰告白であった。イエスを見たいの一念の中に信仰の核があった。

「求めよ、さらば与えられん」とは、このような全身的、全存在的な求めのことである。町から帰ってくる母親を待ちわびて、姿を見るや否や「お母さん！」といって走り迎える幼児（おさなご）の心、幼児のあり方、分裂のない求め。イエスが「幼児の如くならなければ」といっているのがこれらである。イエスがザアカイのこの気魄を非常に喜ばれたわけである。人々に嫌われている取税人の長ザアカイであればこそ、却てその人の中に光っている大切なものをハタと見ぬき、そこからその人を救うのがイエスのイエスたるところである。》（207頁）

ここで、

「信仰とはこのような全身の投入、突破、突入である。ザアカイのこの行動が彼の信仰告白であった。」

と書いてある。「信仰告白」といったら、

「人の前で何か言わないといけない」

とか、そういう

「何かしなくてはならない」

とかいうような、そういう堅いものではないということなんです。

「これがザアカイの信仰告白であった」

と書いてあるでしょ。こういう言い方をする人は小池辰雄以外にいないのではないかと思う。僕らは、「信仰告白」といったら、

「人の前で何か言わないといけない。人の前で洗礼を受けないといけない」

とか、そういうことではないんですよ。

「人と接した時にイエスの名前を言わないといけない」

とか、そんなことを言っていたら、堅苦しくて生きてられませんよ。もっと自然なかたちです。これはザアカイの自然な態度でしょ。何も力（りき）んでいませんよ、ザアカイは。そのままイエスに会いたい、見たいという一心で、

「桑の木によじのぼるという行動に出る。これが信仰告白である」

と、小池は言っている。だから、我々が「信仰告白」といって、

「イエスの名前を言わないといけない」

とか、そういうふうなことに囚われないでほしいと思う。そういうことではないですよ、信仰告白とかいうのは。

「自然に喜んで生きていること」

が信仰告白なんです、それを人が見たらね。ここで小池辰雄だけですよ、こんなふうにザアカイのこの態度を信仰告白であるというようなことを言っているのは。おそらく小池辰雄以外にこんなことを言っている人はいないのではないかと思う。

「信仰告白」という言葉そのものは非常に堅い言葉ですよ。けれども、

「自然なこういう在り方が信仰告白です」

と、小池辰雄が言ってくれている。だから、我々の生活態度が、

「喜んで生きている」

ことが信仰告白なんです。そうすると、イエスの名前を知らなくても、

「天国では、イエスの名前さえ知らない人でも、砕かれた魂の人はイエスの所へ行きます」

と、小池辰雄はどこかで言ってくれていました。それがここで、

「ザアカイのこの行動が彼の信仰告白であった」

と書いてある。このことは非常に大切なことだと思う。

「クリスチャン」という言葉さえも、僕自身は、

「なにか堅い言葉だな、なにかちょっと嫌な言葉だな」

と思う。そうじゃないんですよ。

「キリストにあって喜んで生きていること自体がもう信仰告白」

だから、そうやっていてたら、誰かが気付いてくれますよ。大抵の人は気づきません、そんなことは。大抵の人は気づきませんけれども、このザアカイのように――おそらくザアカイは孤独で、なにか気持ちの上で空白があったんでしょうね――そうでないと、「キリストを見たい」とか思いませんもの。そうでしょ。他の人は、

「罪びとの家に入った」

とか言うでしょ。そういう人は、そういう心の空白なんか、空洞なんかはないと思うけれども、ザアカイはやっぱりそういう空白があったんだと思う。心の中に空洞みたいなものがあって、満たされないものがあったから、

「イエスという人に一目会いたい」

という一心があった。そうすると、他人のことなんか全然気にしないわけですよ。他人が何を言おうと、もう好き勝手なことをしたわけでしょ。

「桑の木によじのぼって見てやろう」

とかいう。そういう子供っぽい思いがやっぱりあって、それをキリストが、

「あ、このザアカイの中には偽らない澄んだ魂があるんだな」

ということが分かった。それがイエスには分かるということが信仰告白でしょ、ザアカイの信仰告白なんです。それをキリストが受けとられたということです。

●伝道

我々は「伝道」とか、そういう何か堅苦しい言葉を使いがちですけれども、そういう堅苦しい言葉を横に置いといて、

「ザアカイのこの態度が信仰告白である」

というようなことを小池辰雄が言ってくれているんだから、我々もそういうふうな態度で信仰告白していったらいいと思う。それはザアカイにしかできないことだったんでしょう。我々は、僕自身としては僕のできること――Mさんならしかできないこと、その他の人はその他の人しかできないことがあると思う――これはザアカイしかできなかったことだと思う。それぞれ個性があって、それぞれのDNAがあるから、それによってそれぞれの信仰告白があって然るべきです。

「イエスを見たいの一念の中に信仰の核があった。」

と書いてますでしょ。「信仰の核」だけですよ、これは。そういう態度が信仰の核なんです、イエスを見たいという一心です。それは、何で見たいかということは書いてませんけれども。僕はさっきから、

「ザアカイの心の中に空洞があったのではないか」

とか言ってますけれども、それは分かりません。分かりませんけれども、ただその態度からいったら、ザアカイのこの

「イエスに会いたい見たいという一心が信仰の初め、信仰の一番最初の小さい核」

なんです。それを、

「こういうザアカイの行動そのものが信仰告白であった」

と小池辰雄は言ってくれている。スーッと読みとばしていくと、こういうのを全部読みとばしていきます。けれども、小池辰雄がこれを「信仰告白」と受けとっているところがやっぱり、他の人とはちょっと違うなと思うんです。

「「求めよ、さらば与えられん」とは、このような全身的、全存在的な求めのことである。」

ザアカイは、イエスを見たいの一心が、

「求めよさらば与えられん」

の、この「求め」であったということですね。

「全身的、全存在的な求め」

という。この言葉も難しいですよ。こういうことを言われると、体が固くなって、

「全身的に何かしなくてはいかん」

と思ったりする。そうじゃなくて、これもあとに書いてあるでしょ。

「子どもが町から帰ってくる母親を待ちわびて、姿を見るや否や「お母さん！」といって走り迎える幼児の心、幼児のあり方、分裂のない求め。」

と言っている。だから、「あるがまま」ということが非常に大切なんですよ。もう幼児と同

じような生き方をすると、こんな楽なことはない。ザアカイだってこういうことをやったけれども、全然、力（りき）んでいないでしょ。どこにも力みがないですよ、ザアカイに。もうやりたいだけをやっている。その、やりたいだけやっているような、その心根をイエスは受けとられた。それは待ちわびた子どもが

「お母ちゃん！」

と言って走り寄ってきた時に、誰も

「お前なんか来るな」

と言いませんよ。全部、引き受けますよ。子どものそういう態度を見たら、もう抱いてやらないではおれなくなるでしょ。そういうことを

「天的必然性」

と言っている。あの母の態度ですよ、そうせざるを得ないでしょ。走り寄ってくる子どもを抱いてやらないとおられないでしょ。それは何も考えてませんよ。もうそれこそ「天的必然性」なんです。もう抱いてやらないではおれないという、そういう態度をここで小池辰雄は言っている。

「人々に嫌われている取税人の長ザアカイであればこそ、却てその人の中に光っている大切なものをハタと見ぬき、」

と。本当にそれは大切なものなんです。ザアカイの一番大切なものをイエスは見られたんです。その人の中に光っている大切なものを見てとる。我々の魂の在り方とかが、本当に大切なことなんです、僕らが生きているということが。その中で光っているものがあれば、それをイエスは必ず見ぬいて受けてくださるに違いない。そこをここに小池辰雄は書いています。

「イエスがザアカイのこの気魄を非常に喜ばれたわけである。」

と。ここに「気魄」と書いてある。「気魄」と言ったら、またこれは力が入りますよ、こんな言葉を聞いたら。「全身全霊」とか「気魄」とか。けれども、小池辰雄が言っているのは、そういう言葉の上だけで、ここに例をあげて幼児の姿を言っているでしょ。その態度が、まぁ言うてみたら、幼児の気魄ということなんですけれども、幼児がそんな気魄で母親のところに飛び込むわけはないわけですよ。だから、やはりこういう何か力のぬけた、そういうザアカイから学ぶものはそういうところではないかなと思います。

「もうありのままでいいんだ」

ということだと思います。

もう時間なので、ここまでにしておきたいと思います。ずうっとまだザアカイのことが続きますけれども、これはまたその次のときにやりたいと思います。では、今日はこれで終わっておきます。